

水文地名の成立由来と分布特性 —国内外の比較の視点から—

森 和紀

(三重大学・日本大学)

キーワード：水文地名，水文環境，分水界漏出，宙水，武蔵野台地，ライン・ドナウ流域圏

《 要 旨 》

I. 背景と動機，目的

ある特定の地域に固有の名称としての地名は，土地の自然・人文事象や歴史的背景を反映しており，人が集まり居住するに至った集落の成立と密接に関わってきた。したがって，地表空間を定める地理的名称の一種である地名に着目することによって地名を指標に地域の自然環境の特徴や変遷の過程を読み解くことが可能であり，そこには国内外を問わず共通点が見出されると考えられる。特に自然地名の中で，地形地名であれば山・丘・台・坂・谷・砂等の字句，気候地名であれば日・雲・風・雨・霧・雷等と，それぞれ地名に付された文字から地域の自然特性に基づく地名の由来を連想できる場合が多い。これに対し水文地名には，例えば水流(ツル)に弦(ツル)や鶴の字を当てる地名にみられるとおり，地域本来の水文環境を示唆する文字に当て字が用いられる例が見受けられ，地名がその地域の地表水や地下水の特異な性状に必ずしも結びつかない場合も多い。逆に，雨との関わりを一見想定させる Regensburg (ドイツ) のように，女王の意であるラテン語の *regina* に由来し判別に留意が必要な例がある。国内でも同様に，地域の水文環境を明らかに意味すると類推される字句が含まれる地名であっても，合成地名，あるいは開墾に従事した人物の名や豪族の姓に因む事例があり，付会であるか否かの判定が重要な課題である。欧文標記の外国地名については語彙の派生過程を辿る必然性が高く，地名の成立由来を漢字から類推する国内の場合とは異なる点が指摘される。

本発表では，国内における水文地名の考証に武蔵野台地東南部を対象とした。ロームに厚く覆われ地下水面の深い武蔵野台地は，利水の面から元来が乏水地域と位置づけられてきた。宙水に代表される局地的な水文条件が集落の立地と深く関わることから，武蔵野台地では地名と水文環境との結びつきの強いことが想定され，武蔵野台地は水文地名の考察にとって好個の地域であると思われる。一方，外国地名の事例については，典型的な国際河川であり，分水界を越える運河によって単一の流域圏を構成し東西ヨーロッパを包括するライン川・ドナウ川の両流域を主な対象地域とした。水文地名を掘り所に地域の水文環境との整

合性を検証し、由来に基づき分類される水文地名の分布特性を見出すとともに、国内外の水文地名の共通点について比較検討することを目的とする。

II. 水温の特異性に由来する地名

国外における所謂“冷たい川”の事例として、集落名の **Coldstream** (スコットランド)、河川の名称の **Kaltes Wasser** (ドイツ) と **Kaltbach** (スイス)、集落名・河川名の **Kaltbach** (オーストリア) があげられる。これらの水文地名とは対照的に、“温かい川”を意味する集落名・河川名 **Warmbach** (ドイツ) の例もみられ、湯治場や入浴を意味する **Bad** を語源とするバーデン地方に位置することから、温泉水の流入や河道への湧出、温泉排水の混入に起因する比較的高温な河川水温に由来する地名の成立が示唆される。

翻って国内に“冷たい川”の名称を探ると、冷(ヒエ)川の例に狩野川水系(静岡県)・員弁川水系(三重県)、冷(ヒヤ)川に大分川水系(大分県)、冷(ツマ)川に木曾川水系(長野県)・神通川水系(富山県)がある。一方、“温かい川”の河川名としては、温(ヌル)川の例として米代川水系(秋田県)・岩木川水系(岩手県)・利根川水系(群馬県)、温(ヌイ)川に汐泊川水系(北海道)、温(ヌミ)川に九頭竜川水系(福井県)、温(オン)川に信濃川水系(新潟県)があげられる。“冷たい川”が西南日本に偏在するのに対し、“温かい川”は東北日本に分布が卓越する点も特徴である。

国内の“冷たい川”の一例である員弁川源流部の支流、冷(ヒエ)川の北側に隣接する支流河内谷(コチガニ)川では、員弁川本流と比較し夏季に低い河川水温と高い電気伝導度が観測され、河川の水温・水質に有意な差異が認められる。特に、低水から濁水の流況において本流の比流量に対する支流の比流量の比が大きな値をとる事実は、支流への基底流出の寄与が大きいことを示す結果として興味深い。地下水の分水界漏出には、地下水分水界と地形分水界に一致がみられず、地下水分水界が隣接流域に位置する場合、および地層の単斜構造に起因する二つのケースが考えられ、夏季の低い河川水温の体感に基づく冷川の河川名の由来については、直接流出に比し基底流出が大きな比率を占める流域の水文特性が要因であると指摘できる。

III. 水の特徴的なあり方に由来する地名

(1) 河川の合流点

河川の合流に因む水文地名は国内外にみられ、ドイツ西部の都市 **Koblenz** の地名はライン川とその支流モーゼル川との合流点に由来し、合流もしくは合流点を意味するラテン語の古称 **confluentes** (英語 **confluence**) が訛った地名である。同じくブゼント川とクラーティ川の合流点に位置する南イタリアの都市 **Cosenza** は合同(合流)する意であるラテン語 **consentia** が語源であり、同義のクアラルンプール(マレーシア)はマレー語の **lumpur** (濁った) と **kuala** (合流点, 河口) を語源とする。

合流に由来する国内の水文地名には、河合・川合(奈良県北葛城郡河合町川合, 茨城県常

陸太田市[上・下]河合町), 落合(常陸太田市落合町, 東京都新宿区[上・中・下・西]落合), 会津(福島県会津地方), および三津合(福島県喜多方市山都町三津合)の例があげられ, 地形図が地名の由来を如実に物語っている。

(2) 沼沢

沼沢に由来する外国地名の例にルーマニアの都市 Timișoara がある。都市名はダキア語で沼地を意味する *temes* と都市の意の *vár* に由来し, 製作年代の異なる 3 葉の地図を比較すると, 現在(2018年)および近年(1938年)の地図からは読み取ることのできない土地の自然特性が 1718 年発行の古地図から判読することができ, 地名の語源に沼沢を求める所以が解釈できる。

国内では, 東京都杉並区上井草・天沼(アマヌ)における地下水の特徴的なあり方に由来する沼沢の事例があげられる。井草の地名由来には自然地名・人文地名を含め複数の説があるが, 上井草四丁目・天沼一丁目の近辺一帯における地下水位の等高線を 1880(明治 13)年測量の地形図を基図に作成した地下水面図から判断すると, 善福寺池と妙正寺池の周辺に湿生の藺草(イガサ)が自生していたとする説が理にかなっていると考えられる。藺草はもともと湿地や沼に生える植物であることから, この地は地下水面が浅い低湿地であったと想定される。善福寺川は現在の杉並区和田二丁目・中野区弥生町六丁目の和田廣橋下流で神田上水に, 妙正寺川は新宿区下落合一丁目地先の辰巳橋で同じく神田上水に合流するため, 井草から天沼にかけての一带は上水の涵養域として古来重要な地であった。この地域における地下水の特徴的なあり方として, 井草から東南東方向の天沼に延びる地下水堆の分布が地下水面図から明瞭に判読される。

天沼については, 現在は枯渇している天沼辨天(バンテン)池が降雨後に水面積のさらに大きな沼になることから, 雨(アマ)沼が転訛したとする説の確証が高い。雨(アマ)があまとなり天(アマ)に結びついた地名は, 元来が降雨後に冠水する地区や降雨量の多い場所であり, 京都府福知山市天田(アマダ), 伊豆半島中央部の天城(アマギ)山等の例がある。各地にみられる湿地・沼地に由来する天沼の地名を現行の住居表示について検索した限りでも, 宮城県大崎市岩出山下野目雨沼(アマヌ), 愛知県稲沢市天池(アマイケ)町, 埼玉県川越市天沼新田等の例があげられる。杉並区天沼は神田川に流入する桃園川の水源地となる低地に当たり, 平坦な台地に池沼が出現する特異な景観が地域の人々の耳目を集めたと推察される。

井草と天沼について述べた上記の地名由来は, 地下水面断面図からさらに明らかである。善福寺川と妙正寺川の流路にほぼ直交する方向, および平行する方向にとった 3 本の断面位置について, 合わせて地表面の断面図と共に判読すると, 井草と天沼の両地区には凹地が形成されていることに加えて地下水面の浅い低湿地の特徴が読み取れる。

(3) 宙水

以下では, 武蔵野台地の水文地名の事例について解題する。

杉並区上高井戸・下高井戸・高井戸東・高井戸西の近辺一帯について, 1921(大正 10)年測量の地形図を基図として地下水面図を作成した。この地には地下水面等高線の不連続な

部分が線状に続き、地下水瀑布の分布が地下水面図から判読される。地形図中の高井戸村字上高井戸・下高井戸の一带は、北西からほぼ南東方向に連なる2列の地下水瀑布に挟まれた地域に位置しており、地表面から地下水面までの深度が5 m以浅の範囲と重なる。

武蔵野台地は河谷の沖積低地と開析谷を除けば地表がローム層によって覆われており、有力な帯水層とみなされる地層は段丘を構成する砂礫層であって、武蔵野礫層・立川礫層がこれに相当する。一方宙水は、ローム層の下部が粘土質化し難透水層となった部分、および下位の砂礫層上部に粘土層が局部的に挟まる部分に賦存することから、地下水面図から判読される不圧地下水の特徴的なあり方は宙水の分布と密接に関連していることが示唆される。宙水は不透水層もしくは難透水層が本水の不圧地下水面より高い位置に分布する保持層、すなわち宙水床によって形成される地下水の形態であるので、宙水が賦存する地域の周辺では、宙水床が薄くなり消失する地点において地下水面の高度が急変する現象が認められ、地下水瀑布が形成される。台地上にありながら地下水面の深度が比較的浅い宙水の分布域において集落の立地と発達が古くまで遡る事実は、水利条件が人々の暮らしにとって重要な要因となったことの証左であろう。

(4) 沢

地名の由来に水文環境との関わりを類推させる例として、沢を共通の地名とする世田谷の七沢（北沢・野沢・深沢・奥沢・廻沢・代沢・駒沢）がある。ただし、これらの地名のうち代沢は合成地名であり、駒沢は1889(明治22)年に成立した新しい地名である。野沢は草地・林地から成る未開墾の地の沢と解釈され、深沢と奥沢は共に呑川の上流域に位置し、地下水面の浅い谷底の湿地にあたる奥深い谷地(ヤチ)、すなわち沢に由来する地名である。加えて、練馬区羽沢(ハザリ)も同じく沢に由来する水文地名と捉えることができる。1921(大正10)年測量の地形図では羽根澤の表記がみられ、地名の起源を沢に求める点では変わらないが、埴沢(ハヅリ)が羽根沢へ転化したとの説もとられる。千川上水から分派して北流し石神井川に流入する羽沢分水の谷底にあたる現在の羽沢二丁目にはかつて湧水がみられ、埴輪を作る際の粘土質の埴(ハ)が産出する沢であったと考えられている。

武蔵野台地を流下する河川の多くは台地上に水源をもち、特に武蔵野面・立川面を流下する小河川は湧水に涵養される場合が多いために侵食・運搬作用が小さく、関東ロームの存在が谷の分布と大きく関わっている。沢とは本来、河川の源流部から上流部にかけてみられる小規模な雨裂よりは大きな谷と定義されることから、特に渇水期においては涵養源としての地下水との関連が深い水文特性の地域である。沢に由来する地名の位置を土地条件図、および標高10mごとの等高線図に示した結果、台地を開析する谷とほぼ一致することに加え、標高30mから40mの帯状の範囲に分布することが特徴である。

IV. まとめ

後掲(p.16)のPowerPointスライド「要約」の項を参照。

参考文献については記載を省略した。

水文地名の成立由来と分布特性 —国内外の比較の視点から—

森 和紀
(三重大学・日本大学)

第15回ちかすいネット
2018年12月1日



1



2

背景と動機

- 地名とは：○地域に固有の自然特性および社会・人文特性の反映
- 都市が形成されるに至った土地の自然と歴史的事象を背景
- 《語源が水に由来する地名を対象に国内外の事例を比較》
- ⇒漢字・欧文の表記を問わず共通点が見出されるのではないかな
- ⇒⇒地名を拠り所に地域の水文環境の特異性が判断できるのではないかな

目的

成立由来に基づき分類される水文地名を指標に、地域の水文環境と地名との整合性を考証し、水文地名の分布の特徴について検討すること。

手法

- 水文地名の選別
- 水文地名の由来の特定—水文環境¹⁾²⁾との整合性の検証
- 1) 特異な性状(河川水温)
- 2) 特徴的なあり方(沼沢・湖・宙水等)



3

武蔵野台地における地名の由来別にみた典型的事例(旧地名を含む)

自然地名	水文地名	池沼	天沼(Sg)・池上(O)・池尻(Se)・洗足(Me)・堤方(O)・沼袋(Na)・沼部(O)
	湿地	阿佐谷(Sg)・井草(Sg)・萩窪(Sg)・蒲田(O)・鎌田(Se)・瀬田(Se)・谷原(Ne)・芳窪(Me)	
	沢	奥沢(Se)・北沢(Se)・野沢(Se)・羽沢(Ne)・深沢(Se)・廻沢(Se)	
	湧水	和泉(Sg)・大泉(Ne)・清水(Me/Sg)・祖師谷(Se)	
	井戸	新井(Na)・石井戸(Se)・石神井(Ne)・高井戸(Sg)・中井(Sh)・貫井(Ne)	
	河川	赤堤(Se)・揚場(Sh)・江古田(Na)・落合(Sh)・玉堤(Se)・弦巻(Se)・等々力(Se)・目黒(Me)・和田(Sg)	
	用水	川添(Na)・桜上水(Se)・水道(Sh)・堀ノ内(Sg)・淀橋(Sh)	
気候地名	旭(Ne)・雨間(Ak)・有明(K)・春日(Ne)・霞ヶ丘(Sh)・小日向(B)・東雲(K)・東陽(K)・戸吹(H)・日暮里(Ar)・八雲(Me)・雪谷(O)		
地形地名	市谷(Sh)・大岡山(M)・大久保(Sh)・大原(Se)・尾山台(Se)・神楽坂(Sh)・久我山(Sg)・向山(Ne)・三谷(M/Sg)・駿河台(C)・高輪(Mi)・長谷戸(Sh)・根津(B)・円山(Na)・谷中(T)		
人文地名	愛宕(Mi)・音羽(B)・粕谷(Se)・三軒茶屋(Se)・松庵(Sg)・雑色(Na)・太子堂(Se)・笹筥(Sh)・土支田(Ne)・舎人(Ad)・業平(Sm)・碑文谷(Me)・宮前(Sg)・弥生(Na)・祐天寺(Me)		
植物地名	梅里(Sg)・榎(Sh)・栗原(Ad)・小竹(Ne)・桜(Se)・椿(Ad)・萩中(O)・松ノ木(Sg)・桃井(Sg)・柳原(Ad)・山吹(Sh)・若葉(Sh)・若林(Se)		
合成地名	井萩(Sg)・駒沢(Se)・大京(Sh)・代沢(Se)・蓮根(I)・本塩(Sh) ほか多数		

Ad:足立区 Ak:あきる野市 Ar:荒川区 B:文京区 C:千代田区 H:八王子市 I:板橋区 K:江東区 Me:目黒区 Mi:港区 Na:中野区 Ne:練馬区 O:大田区 Se:世田谷区 Sg:杉並区 Sh:新宿区 Sm:墨田区 T:台東区

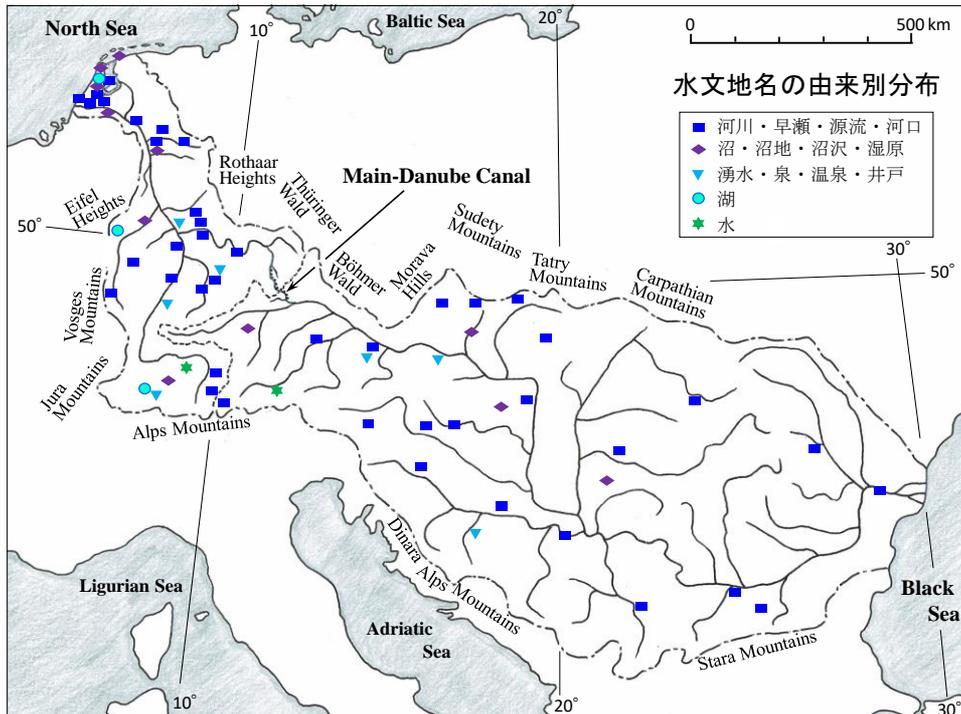
4

ライン・ドナウ流域圏における水文地名の由来別にみた該当数と代表例・語源

成立由来	該当数	代表例	語源
河川 早瀬 源流 河口	42	Arad (<i>R</i>)	árvíz (洪水, 流れ): マジャール語
		Banská Bystrica (<i>Sa</i>)	bystrica (早瀬の) banská (鉱山)
		Dortmund (<i>G</i>)	Throtmanni (谷の水流): 古高地ドイツ語
		Dunaujvaros (<i>H</i>)	danu (川): ケルト語 uj (新しい) varos (町)
		Koblenz (<i>G</i>)	confluentes (合流点): ラテン語
		Linz (<i>A</i>)	lliant (流域): ケルト語
		Maribor (<i>Se</i>)	Mark (辺境) Bach (小川) Burg (城): ドイツ語から転訛
		Veliko Tŕrnovo (<i>Bu</i>)	dru (流れ): 印欧語 -ovo (…のある) veliko (偉大な)
Zagreb (<i>Cr</i>)	za- (…の中の): ハンガリー語 grebl (堀): 古スラブ語		
沼 沼地 沼沢 湿原	11	Morava (<i>Cz</i>)	mar (沼沢地) ahwa (水): スラブ語
		Solingen (<i>G</i>)	Solunga (沼沢地) -ingen (土地, 村): 高地ドイツ語
		Timișoara (<i>R</i>)	temes (沼地) vár (都市): ダキア語
		Zaandam (<i>N</i>)	zaan (湿原) dam (堤防)
湧水・泉 温泉 井戸	7	Banja Luka (<i>Bo</i>)	banja (温泉) luka (港): セルビア語
		Heilbronne (<i>G</i>)	heil (傷が治った) Bronn (泉): ドイツ語
		Lauterbrunnen (<i>Sw</i>)	lauter (澄んだ) Brunnen (井戸, 泉): ドイツ語
湖	3	Interlaken (<i>Sw</i>)	inter (…の間に) lacus (湖): ラテン語
水	2	Innsbruck (<i>A</i>)	inn (水): ケルト語 Brücke (橋): ドイツ語

A: オーストリア Bo: ボスニア・ヘルツェゴビナ Bu: ブルガリア Cr: クロアチア Cz: チェコ
G: ドイツ H: ハンガリー N: オランダ R: ルーマニア Sa: スロバキア Se: スロベニア Sw: スイス

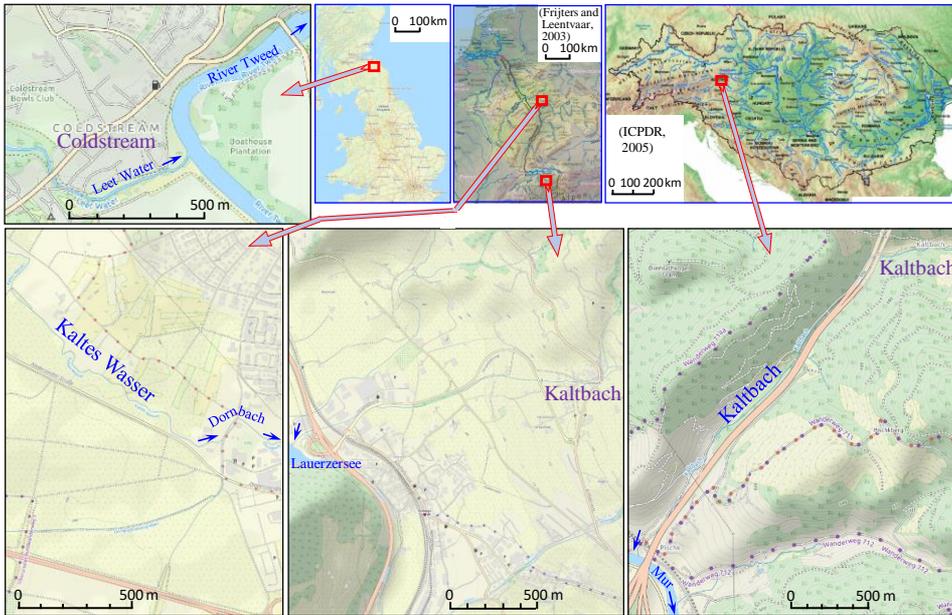
5



6

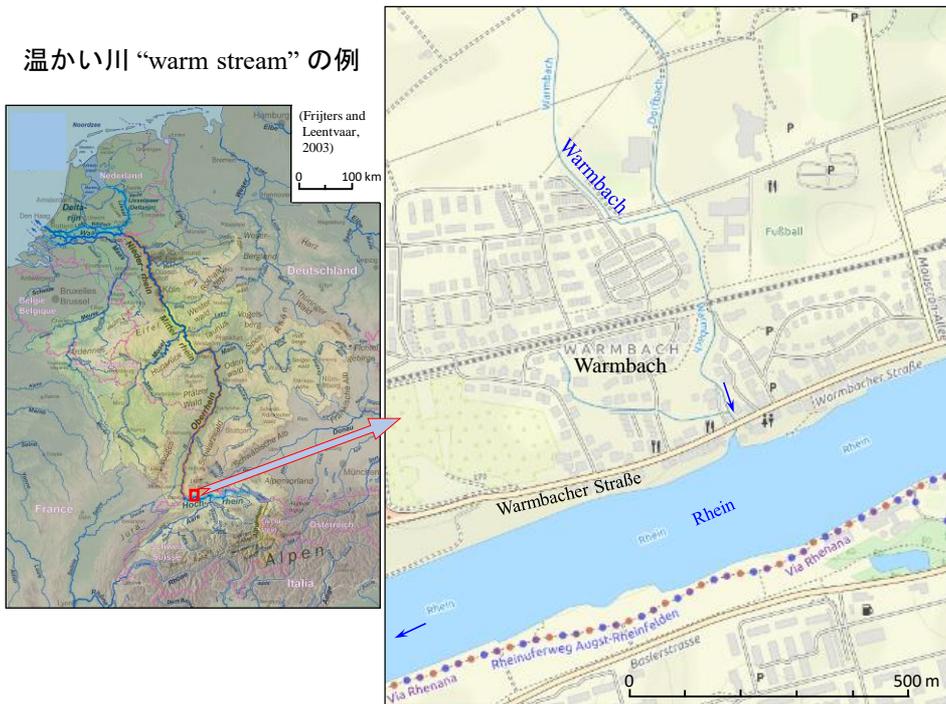
1. 水温の特異性に由来する河川名

冷たい川 “cold stream” : 四例

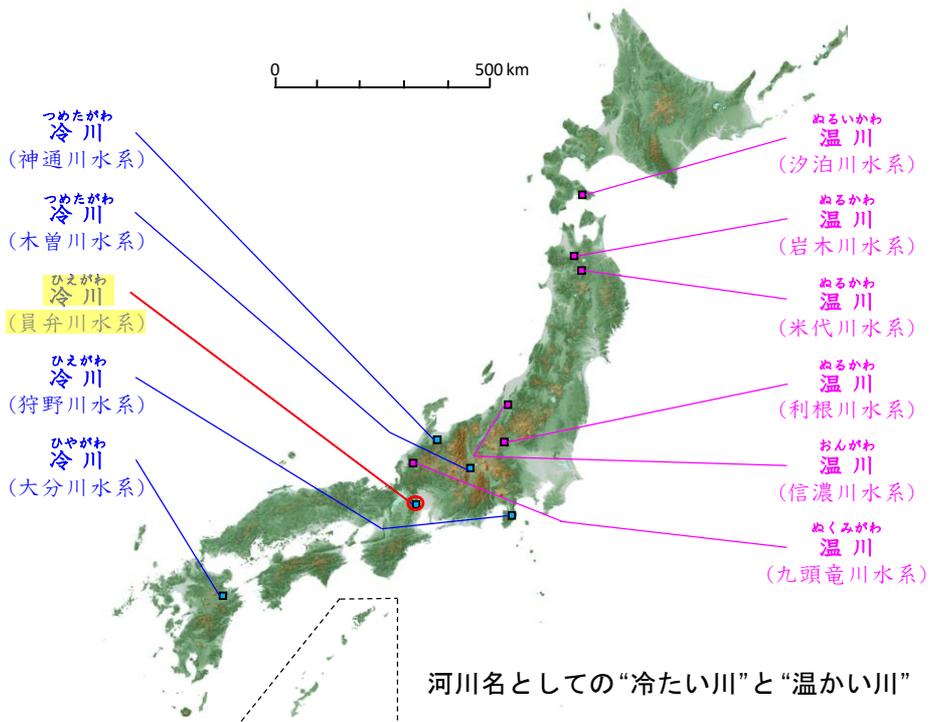


7

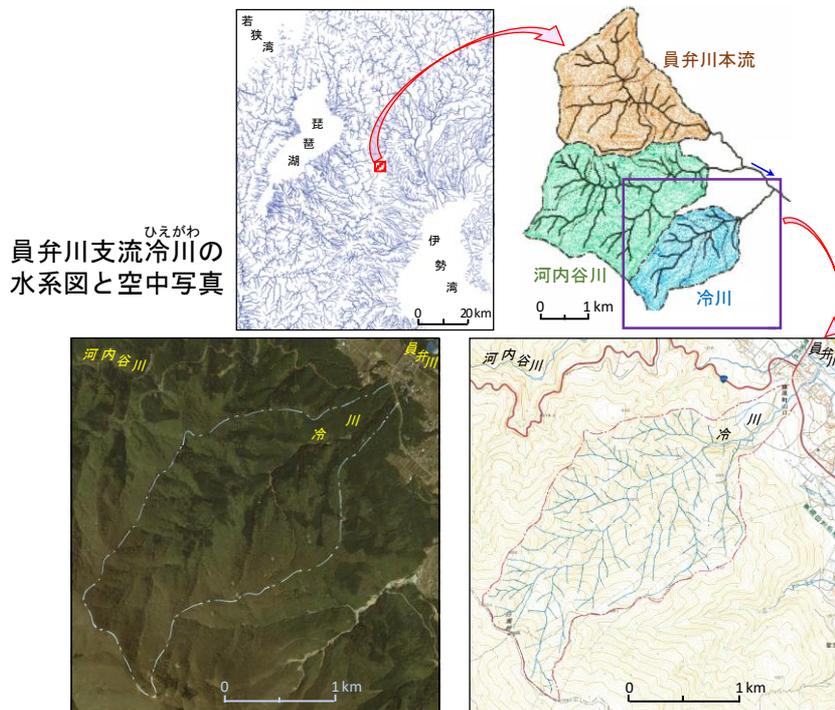
温かい川 “warm stream” の例



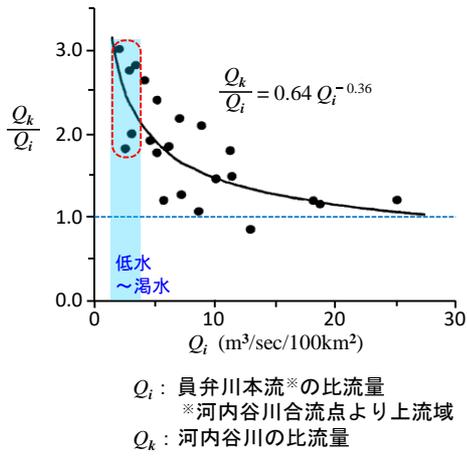
8



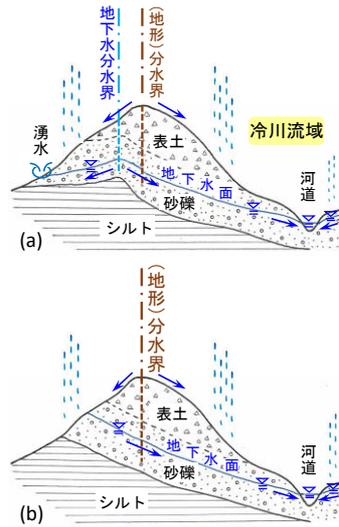
9



10



員弁川本流と支流の比流量の
関係 (溝口・原 [1997] に加筆)

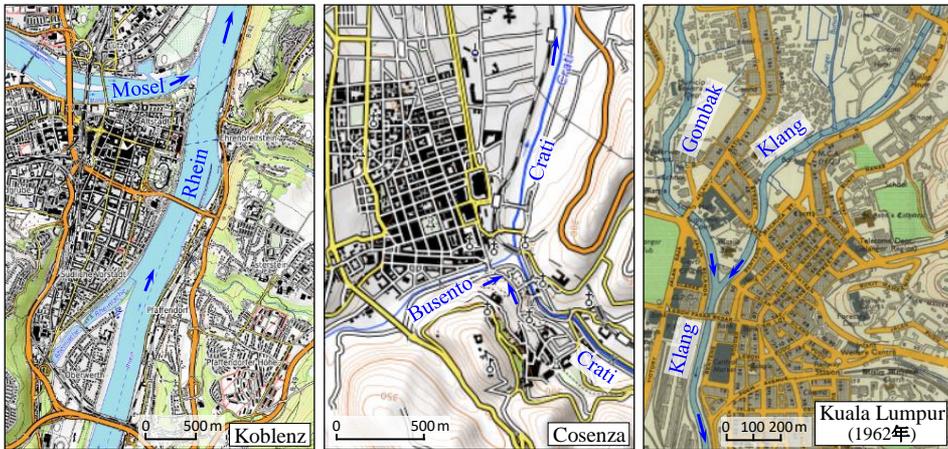


河川名“冷川”の由来を想定
させる地下水の分水界漏出

11

2. 水の特徴的なあり方に由来する地名

2.1. 河川の合流点

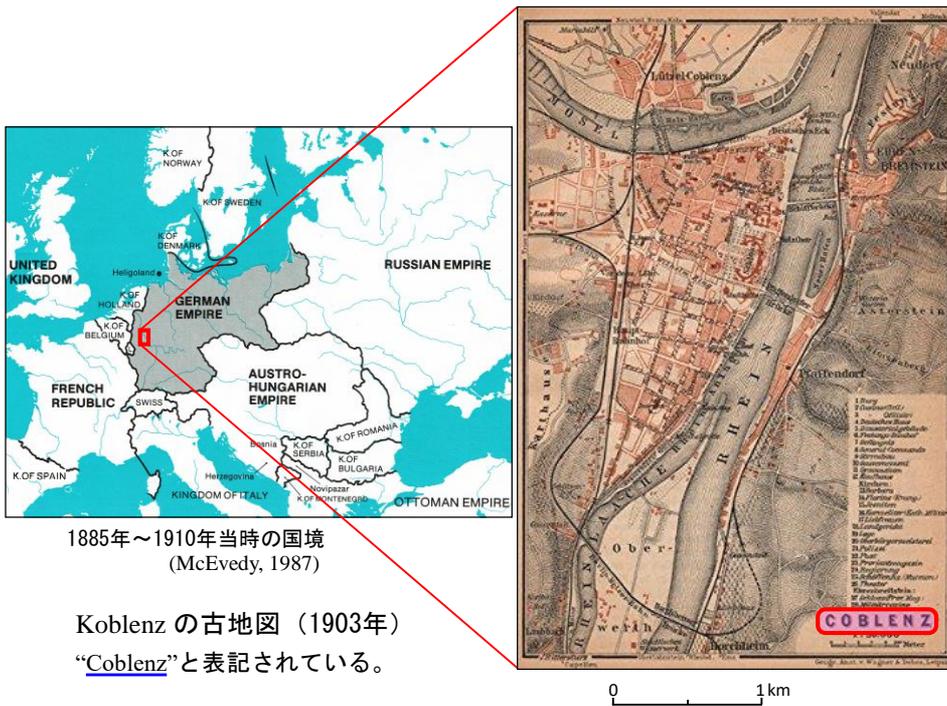


confluentes [L]
confluence [E]: 合流, 合流点

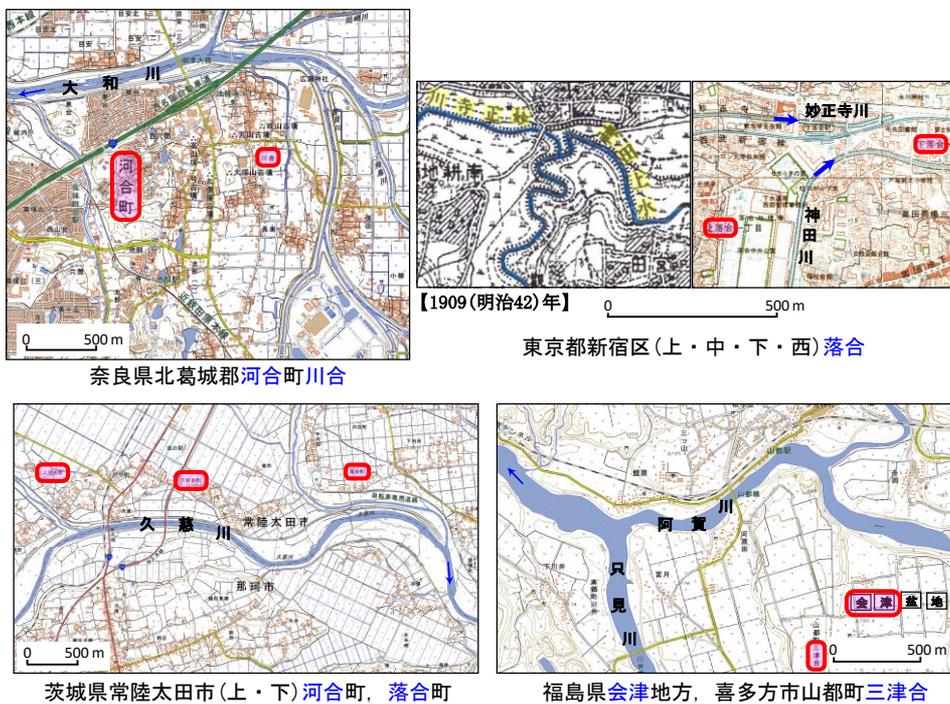
consentio [L]: 合同する
合流する

kuala [M]: 合流点, 河口
lumpur [M]: 濁った, 泥の

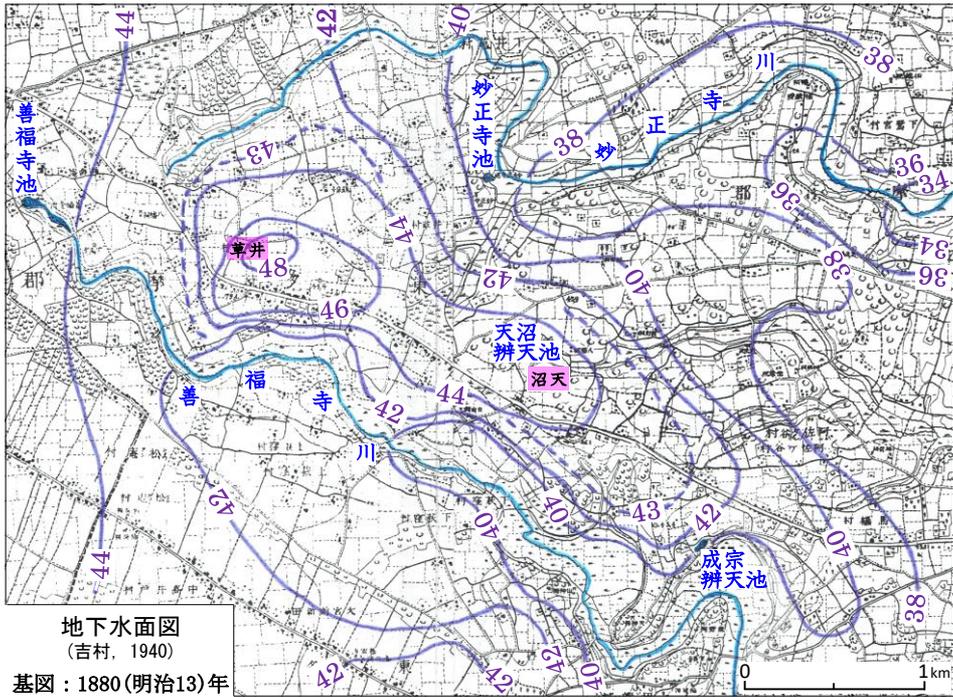
12



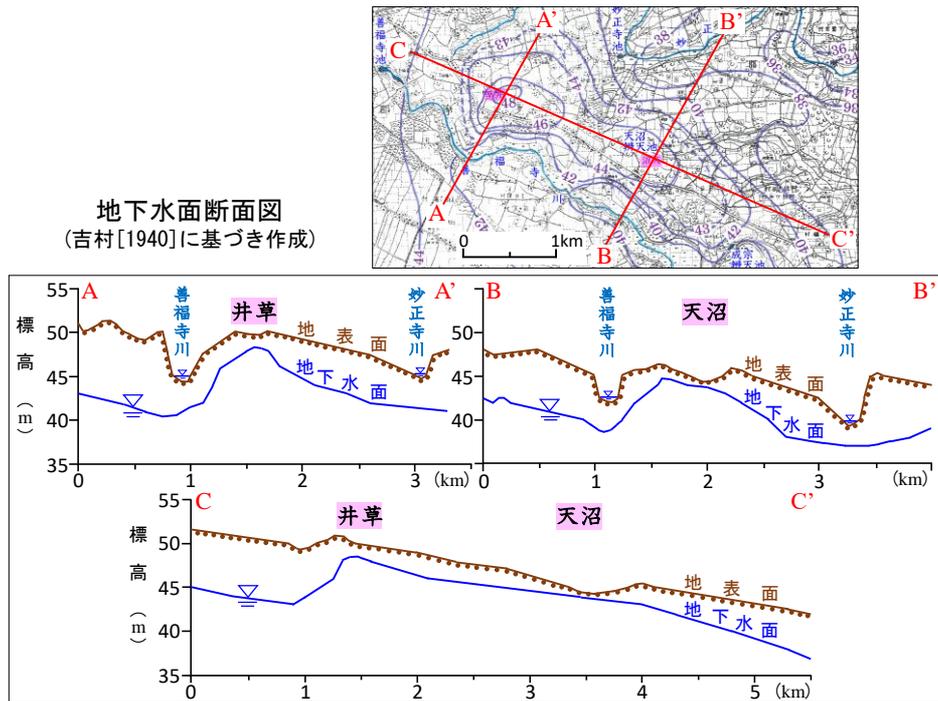
13



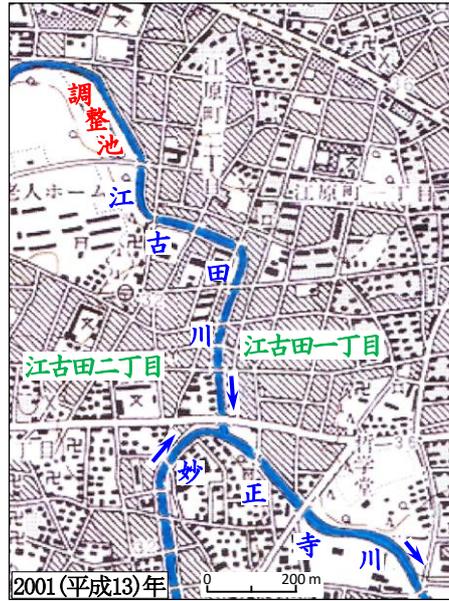
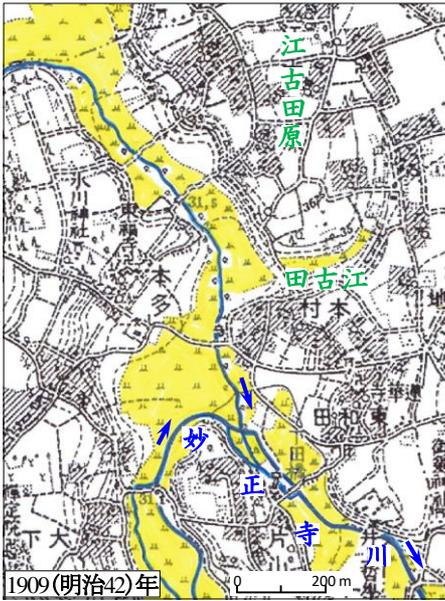
14



17

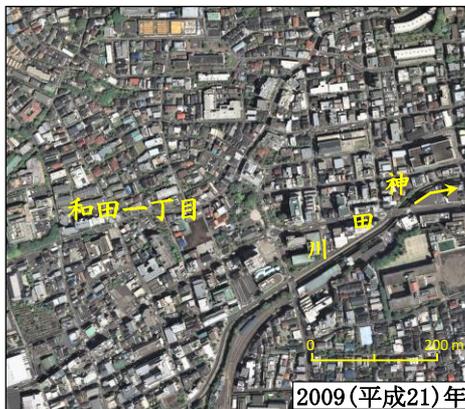
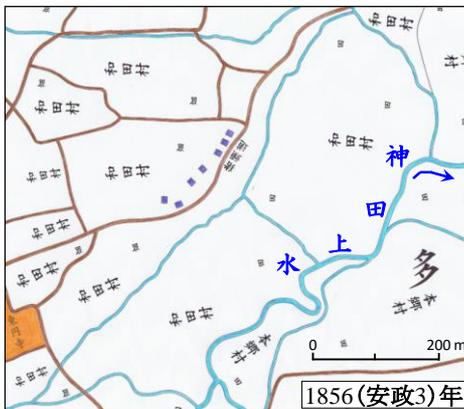


18



江古田
現：中野区江古田一丁目・二丁目

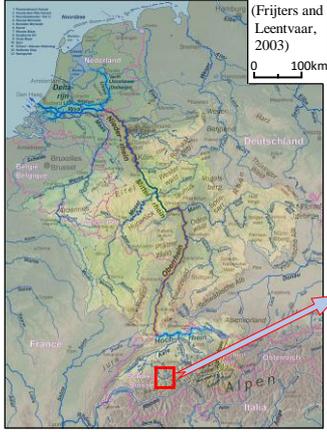
19



和田
現：杉並区和田一丁目

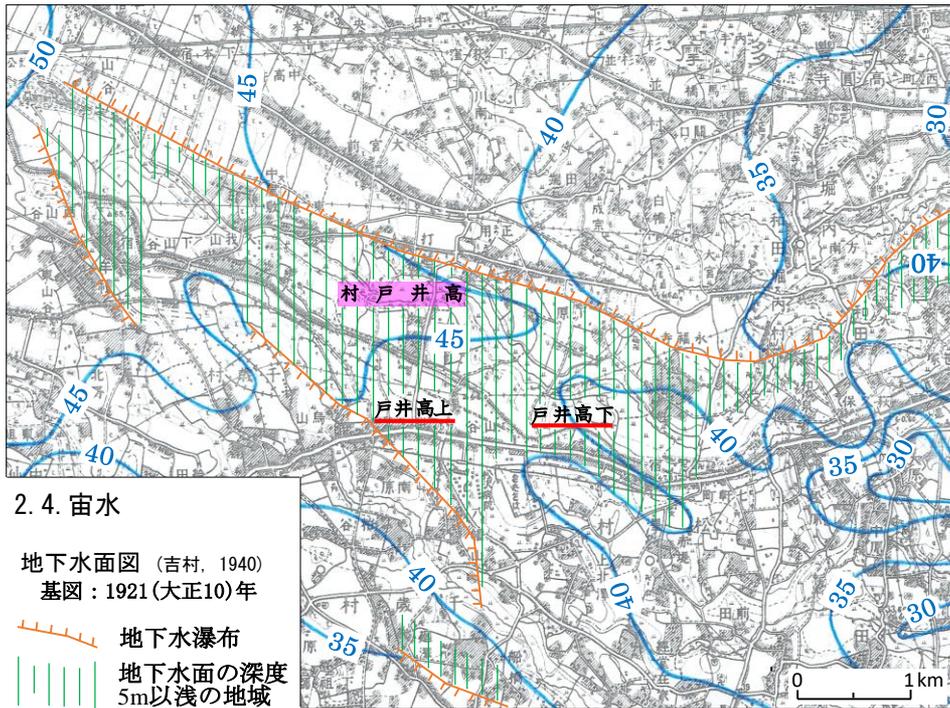
20

2. 3. 湖



inter [L] : 間の
lacus [L] : 湖

21



2. 4. 宙水

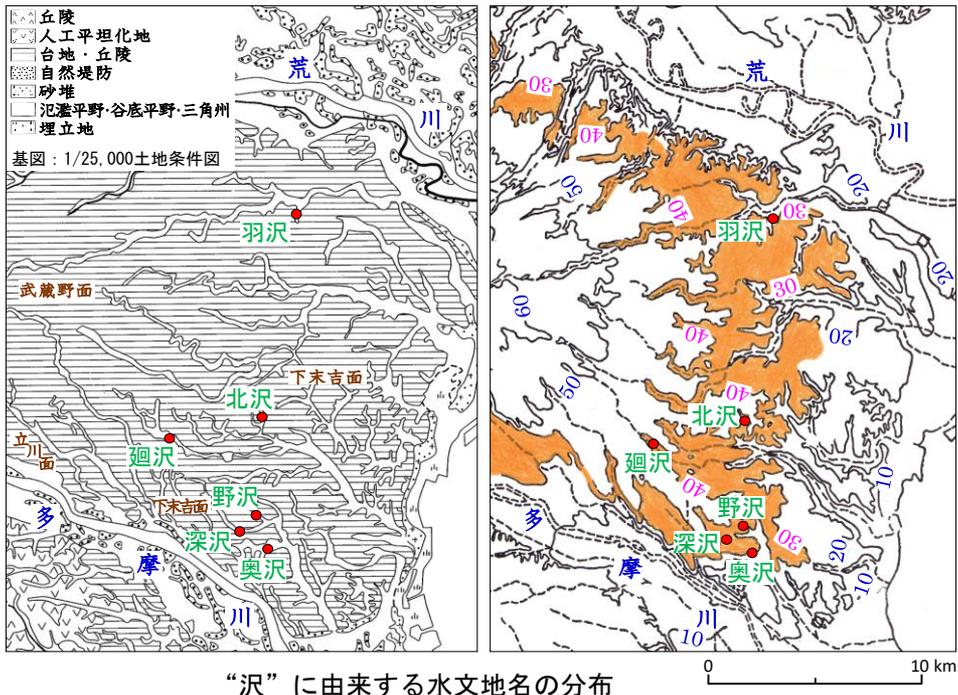
地下水面図 (吉村, 1940)
基図 : 1921(大正10)年

地下水瀑布
地下水面の深度
5m以浅の地域

22



23



24

要 約

- (1) 河川水温の特異性に由来する“冷たい川”・“温かい川”は国内外に共通する河川名であり，特に“冷たい川”の語源は地下水の分水界漏出によって特徴づけられることが示唆される。
- (2) 河川の合流地点を意味する「河合」・「落合」・「会津」の水文地名は国外におけるラテン語やマレー語から派生した語彙と同義であり，漢字と欧文に共通点が認められる。
- (3) 沼沢や湿原に由来する水文地名の多くには，国内外を問わず古地図と地下水面図から判読される水文環境との整合性が認められる。地形起源の窪を意味する国内の水文地名は，ガマやイグサが嘗て繁茂した湿地に由来する。
- (4) 井戸に起源をもつ地名は宙水・地下水堆の分布域との整合性が高く，地下水面の深さと密接に関連する事実が窺える。武蔵野台地の沢に由来する地名は，小河川が開析する標高30～40mの谷口に分布する。

25



26